＜先進地視察＞

歴史的遺産や歴史的景観を活かしたまちづくり

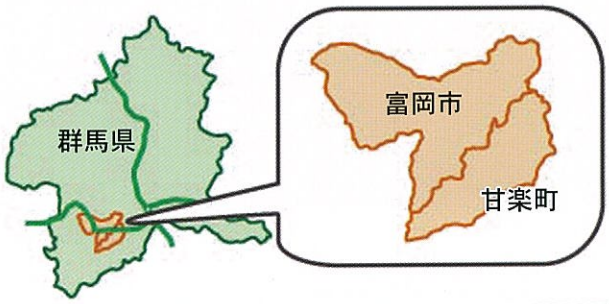
―群馬県富岡市（富岡製糸場）・甘楽町（小幡城下町地区）―

笠間市都市建設部都市計画課
安藏　幸子

平成23年10月31日（月）に群馬県富岡市と甘楽町への「平成23年度茨城県都市計画協会先進地視察」が行なわれました。富岡市では，富岡製糸場の世界遺産登録を見据えたまちづくりについて，甘楽町では，歴史的風致を活かしたまちづくりについて視察しました。

■富岡市と甘楽町の概要

富岡市と甘楽町は隣接しており，群馬県の南西部に位置しています。上信越自動車道と関越自動車道によって，東京と約１時間で結ばれており，平成23年３月の北関東自動車道の全線開通により，茨城からの交通のアクセスも良くなりました。



【富岡市】	【甘楽町】
人口　52,677人	人口　14,141人
面積　122.9km²	面積　58.57km²
（平成23年４月１日現在）	（平成23年３月31日現在）

■富岡製糸場の世界遺産登録へ向けてのあゆみ

平成15年８月	群馬県が「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録を目指すことを発表
平成17年３月	土地区画整理事業を含めたまちづくり計画を見直し
７月	富岡製糸場が国指定史跡となる
９月	片倉工業株式会社より建造物一切を富岡市に寄贈
12月	景観行政団体へ移行
平成18年１月	富岡製糸場の土地を取得
３月	富岡市まちづくり計画の策定
７月	富岡製糸場が国指定重要文化財となる
平成19年１月	「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産暫定リストに記載される
平成21年10月	富岡市景観条例・富岡市景観計画施行
平成23年12月	富岡風景づくりガイド（景観ガイドライン）策定

明治５年（1872）に官営製糸場として操業開始した富岡製糸場は，やがて民間の企業へ払い下げとなり，三井→原合名会社→片倉工業株式会社と経営が移り，操業から115年後の昭和62年（1987）に操業停止となりました。片倉工業株式会社は「売らない・貸さない・壊さない」という方針で，操業停止後も建物の保存と管理に努めたので，創立当初の姿が現在も良好な状態で残っているということです。維持していくためには，年間１億円を超えることもあったというので，その姿勢には頭が下がります。

ボランティアガイドの解説による施設内見学。
後ろの建物は東繭倉庫。
木材で骨組みをつくり，壁にレンガを積み入れる「木骨レンガ造」

世界遺産に登録されるためには，前提条件として，富岡製糸場というコアゾーンの保護はもちろんのこと，製糸場とともに歩んできた周囲の街並みもバッファゾーンとして適切に保護されていることが求められています。

群馬県が世界遺産登録プロジェクトを発表した時には，富岡製糸場周辺の富岡中央地区土地区画整理事業が認可され，用地取得も始まっていましたが，バッファゾーンの確保のため，街並みを一新する土地区画整理事業ではなく，まちづくり交付金事業を活用して歴史的建造物や街並みなどを保存しながらまちづくりを進める手法へ転換しました。

駐車場内にあるまちなか交流館。どちらもまちづくり交付金で整備されています。

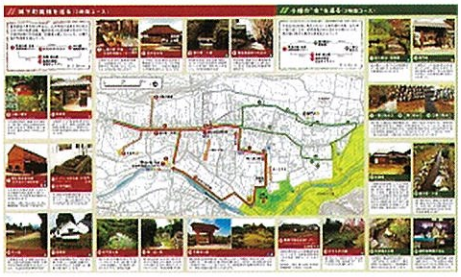
専門家の意見も取り入れながら，周辺住民も含めたワークショップを行い，「地域資源を活かした持続可能なまち～富岡製糸場の世界遺産登録を見据えて～」をまちづくりの目標に，富岡市まちづくり計画を策定。富岡市景観計画では，市内全域を景観計画区域に指定し，製糸場周辺を特定景観計画区域として，建築物の高さや色彩の制限を設けています。世界遺産暫定リストへ記載された後は，観光客が増えていっており，年間20万人を超える人が訪れているそうです。

操糸場。繭倉庫と同じ木骨レンガ造。レンガは，瓦職人が甘楽町に窯を築いて焼きました。

操糸場の内部。
木材を三角形に組んで屋根を支えるトラス構造で，柱のない大空間を確保。採光のため，窓は大きく作られています。

■甘楽町の維持向上すべき歴史的風致

甘楽町は，織田信長の次男織田信雄が初代小幡藩主として，藩政を開始した土地なので，その当時の名残りで武家屋敷や平成12年に国指定文化財となった群馬県内唯一の大名庭園である名勝「楽山園」などがあり，城下町の風情を今に伝えています。明治期の養蚕農家の建造物群が残る街並みの中には，日本名水百選にも選ばれた雄川堰という用水路があり，そこを舞台に伝統行事や民俗行事が受け継がれています。これらの歴史的風致の維持を目指した「甘楽町歴史的風致維持向上計画」が平成22年３月に認定され，同年９月に景観行政団体へ移行。平成23年３月には，甘楽町景観計画を策定しています。



歩きたくなる
まち『小幡』
まち歩きマップ

甘楽町歴史的風致維持向上計画の中で重点区域に設定されている小幡城下町地区には，甘楽町のパンフレットに「町の３つの見所」として挙げられている，雄川堰，武家屋敷，楽山園があり，このエリアを中心に観光客が訪れ，年間11万人の交流人口があります。

担当者の先導により，まち歩きをしてみると，道々の石垣や白壁の武家屋敷から江戸時代の面影が伝わってきます。

雄川堰沿いには桜並木が続き，車道と石畳の歩道を隔てているので，安心して歩くことができ，春には用水路の流れと歴史を感じさせる街並みに桜の花がよく映え，美しいだろうなと思いました。また，楽山園へとつながる中小路は，江戸時代と同じ14mの幅員で残されており，車両が走行できる幅だけ舗装され，残りは古の人馬の往来が目に浮かぶような未舗装の道路になっており，こちらもゆっくりと散策することができます。

雄川堰

中小路

文化庁の補助を受け，平成14年から10か年計画で復元を行っている楽山園は，織田信雄が京都から一流の名匠を呼び寄せて，７年の歳月をかけて作った池泉回遊式庭園です。池も埋められ，荒廃しておりましたが，現在は美しい庭園に復元されています。平成24年３月に竣工となる園内の門や長屋などはまだ新しく，木材の色がまぶしいぐらいですが，何年か後には，生長した樹木や風雨にさらされた建造物が，庭園に風格をもたらしていくと思います。

楽山園。庭園の周りには土塀が巡らされています。
藩主の許可がないと中に入れなかったそうです。

■おわりに

富岡市のまちを歩いていると，絹をモチーフにしたいろいろなお土産が目につき，行政によるハード整備だけではなく，まちを盛り上げていこうという地元の方の努力もうかがえました。そして，街並みに合わせて古民家のような外観の「道の駅甘楽」には，なぜか「イタリアワイン」ののぼりが…。何でもイタリアの姉妹都市から直輸入されているのだそう。まちづくの色は一色ではないことを改めて実感しました。